

【研究論文】

## 異質性の扱い方に関する考察 ～文化の「非交換性」を通して～

鄭 婕（長崎大学大学院教育学研究科・大学院生）

井手弘人（長崎大学教育学部）

### はじめに

留学生である私は、日本人と関わったり日本の文化に触れたりしている間にある違和感を覚えた。それは異文化を「翻訳」することにより、どこまで正確に異文化を伝え、「理解」してもらえるかという違和感である。言葉そのものは「翻訳」できる。しかしながら、文化はそれ自身のコンテクストがあり、その長年積み重ねてきたコンテクストは言葉にして翻訳できない部分があり、同じ「もの」・「こと」に対して深く理解しようとしても母国者と同じような認識に至ることは不可能な部分もある。それは文化における「非交換性」だと私は考える。

高松（2018）は、国際バカロレアで示される汎用性のある学力の一つとして掲げられている TOK (Theory of Knowledge: 知の理論) に関して、「言語 A」分野では「『別の言語に翻訳されることで失われるものは何か、なぜか』等の問いが想定される」と述べている（高松、2018、p. 42）。文化が知識の総体として可視化されたものであると考えるとすれば、それはすなわち非交換性を保持している部分が翻訳によって「失われるもの」である、とすることもできよう。日本の小学校において、「異文化理解」に関しては、世界中の他の国々の文化や知識の習得をねらいとする調べ活動が多いと感じた。それはあくまでも「翻訳」された知識を知ることになり、本当の異文化理解とは言えないと私は考える。ここで、異文化理解の「理解」という言葉について探究してみたい。「理解」の英語訳には三つの単語がある。

①understand、②comprehend、③grasp である。

三つの単語とも日本語では「理解する」と訳すことができる。さらに深い解釈

をしていくと、以下のような違いがある。

①understand：理解した結果の知識を強調する。

②comprehend：理解に達するまでの心的過程を強調する。否定文の中で理解できないとして使われることが多い。

③grasp：語源は「掴む」である。問題の核心を掴む、つまり深く理解する、把握する表現としてよく使われている。

異文化理解の「理解」に当てはめてみると、③の核心まで掴む理解は私たちが追求すべき本当の異文化理解だと考える。異文化理解を図るためには、「異質性」(heterogeneity)を前提として関わるのが大事である。文化の「非交換性」を受け止めることから始めることで、相手の文化を理解しようとし、お互いに尊重することに至ると考えている。

本研究では、文化の「非交換性」を意識しながら「異質性」を扱う教育を通して、「異質性」に対して再認識すると共に、自他尊重や他者と力を合わせて課題を解決する力を育てることをねらいとする。また、実践研究に当たって日本の小学校における「異質性」を扱う教育のプロセスを試みた結果を述べ、実践する可能性を検討したいと思う。

## 1 「異質性」を扱う教育の意義

DeSeCo(Definition and Selection of Competences)では、日常生活のあらゆる場面で必要なキー・コンピテンシーとして、①道具を相互作用的に用いる、②異質な人々からなる集団で相互に関わりあう、③自律的に行動する、と言った三つ選択をした。さらに探っていくと、②の下位カテゴリは「A 他者とよい関係を築く」「B チームを組んで協同し、仕事をする」「C 対立を調整し、解決する」ということが含まれている。つまり、この基準では、障害者や外国人も含め、自分の外側の全ての人が「異質」の存在であることを前提としている。同質に対する「過信」や「異質」である存在を疎かにし、異質性を無意識的に「排除」してしまう可能性も否定できない。集団におけるよりよい人間関係をつくるために、「異質性」を明確にして、それを理解することが大事であると考えている。

日本人は、他国民と比較すると「同質的」とであると主張されることが多い。もちろん、日本人同質論の検証を試み、その結果は日本人の意識は必ずしも他

国民より特に同質的とは言えない研究もあった（間淵(2002)）が、日本の学校現場では無意識に「同質性」を求める教育行為がしばしば見られることも事実である。児童はこのような環境において「いじめ」や「差別」に向かう意識や認識を自らの中に芽生えさせてしまうのではないかと考える。

いじめは何故起こるのだろうか。いじめをする理由は多様にあると考えられるが、共通しているのは「あの人は自分と違う」という認識である。「違い」から劣等感、優越感、欲求不満など様々な感情が生まれる。学校では、全員が「同じ」ルールを守らなければいけない。違う考え、行動をとる人は集団において「目立つ」存在になるため、児童は自分の主張を言えず、他の人に合わせようとする同質性心理を働かせる。多様性や個性を尊重すると言いつつも、なかなか「枠」から踏み出せず、「同質性」の考え方を無意識に育てる日本の学校風土がいじめに繋がる一因となっているように思う。

差別問題も「同質性」を前提とする産物と考えられる。あらゆる基準で自分と他者に差をつけることであり、区別も差別ともいえる。例えば、障害者とのコミュニケーション活動において、明らかに自分と違う特徴に目を付け、「歩ける」を基準にし、自分はできるが相手はできないと区別することで、相手に対して無意識に「かわいそう」と不当に低く取り扱うことも差別だと私は思っている。同質性の視点が働いているため無意識に異質性を排除している。そうではなく、異質性を前提として見ることで、歩けないのは相手の特徴の一つであり、相手としてもっと他の特徴があることに関心を示すはずである。異質性に対して再認識をしない限り、学校において人権教育や同和教育をいくら重視しても、「違うからこそ素晴らしい」という考えは児童の心の中に届かないと思っている。まず、違いの構造を深く理解する必要がある。異質であれ、同質であれ、自分の中でどのような基準に従って判断しているのか、その過程を再認識することで「違いの構造」の変容が見えてくると考える。

人間は自分以外すべてのものは異質である。異質性への再認識は、いじめ問題や差別の問題の解消に効果があると考えられる。異質性を前提にして物事に取り組むと、理解を深めることができ、お互いの多様性を尊重することもできる。本研究の最終の目的は、異質性を具体化して認識する教育を通して、自他を尊重し、異なる他者と力を合わせて課題に取り組む力を育てることである。

## 2 実践研究の方法

### (1) 目的を達成する方法

本研究では、「異質性」を大切にせる教育であるため、教科等を問わず幅広く「違い」を具体化して認識する教育活動を通して、児童の中に異質性への深い理解を図る。そのために、以下のようなプロセスに従って実践研究を行った。

#### ①文化の「非交換性」を明確に意識する。

- ・学習活動の中で、違いを意図的に提示する。
- ・「場」意識をもたせるようにする。
- ・日本と中国の違いに気付くことができるように発問、写真等を提示する。

#### ②「異質性」を改めて認識する、異質だと分かった上で関わろうとする。

- ・児童の既定認識と違う内容を提示し、「違いの構造」の変容に気付くことができるようにする。

#### ③自他尊重することや他者と力を合わせて課題を解決する。

- ・「異質性」を再認識することで、「違い」を前提として「もの」・「こと」を考えることができるようにする。

### (2) 目的を検証する方法

本研究では、質的研究のプロセスを用いて、思考支援ソフト「MAXQDA」を使って以下のようなプロセスでデータ分析を行った。

#### ①セグメント化：児童のワークシートの文字テキストデータの特定部分を切り出した。

#### ②データベース化：自分の主観的な考えに基づき、「似たもの集め」の要領で情報の検索と抽出を行った。

#### ③ストーリー化：それぞれの文書セグメントをもとの文脈から切り離して部品として加工し、それらの部品を報告書の文章という新しいストーリーの文脈の中に組み込んでいく作業を行った。

文字テキストからなる質的データを活用して児童のワークシートを分析し、その分析結果に基づいて調査報告書を作成していく段階では、自分のセンスを生かし、独自の理論的視点に基づいて独特の文脈を構成していった。「データそのものに語らせる」という考えに基づき、児童の文書テキストを帰納的コーディング（データ→コード→概念→理論）と定量的コーディング（理論→概念→コー

ド→データ) の二つのコーディング方法に沿ってデータ分析を行った。

### 3 実践研究の実際

#### (1) 中国語タイム

##### ・春夏秋冬

文化の「非交換性」に気付かせる一つの手立ては「場」意識をもたせることである。この考えの基に、私は「場」をはっきり分け、複数の「場」を作ることで、「場」意識に気付くように工夫をした。

まず、児童に日本の春夏秋冬を想起するように指示をした。次に、中国の北部(黒龍江)と南部(厦門)の春夏秋冬の景色の写真を提示した。「長崎」(日本)という場と「厦門」・「黒龍江」(中国)という場を敢えて分けることで、「場」意識について児童が気付くようにした。

活動において、意図的に「比較」というコードを外したが、児童の文書テキストを読むと、様々な視点で比較していたことが分かった。その際に児童が「場」意識をもつかどうかについて、比較する場所を具体的に書いているかを判断基準とした。つまり、児童が比較する際に、比較の対象として自分がいる長崎(或いは日本の具体的な場所)である「場」と中国の南部・北部である「場」をはっきりさせているかどうかを検討した。その結果、5人の児童の文書テキストに「場」意識に相応しい記述が見られた。

図1のように、K児は日本と中国の北部の四季を比較した際に、中国の北部の黒龍江省は日本の北海道の四季と似ていると感じた。具体的な場所(中国の黒龍江と日本の北海道)をはっきり記述したため、「場」意識をもっていると言えると考えられる。

中国の北の省は、日本の東北地方や北海道の四季に似ている。

#### 図1. K児のテキスト文書

また、図2を見ると、L児の文書テキストには具体的な場所「厦門」と「長崎」をはっきり書いていなかった。しかし、文脈に戻って考えると、「年中暖かい」は厦門を指すこと、「洗濯が外でできていいね」は自分の経験(長崎)に基づいて比較したことが分かった。L児は自分の経験から具体的なもの、気温を用

いて長崎と厦門を比較して、「異質性」に気付いたが、本人が「場」意識をもつかどうかを判断することは難しかった。

日本の四季と中国の四季は、ちがうだなあと思いました。で、中国は、いちねんじゅうあたたかいから、せんたくが外でできていいねと思いました。

## 図 2. L 児のテキスト文書

### ・ 中国の小学校

中国語タイムの活動において、まず児童に中国の厦門の Z 小学校のいくつかの写真（Z 小学校の一週間の時間割、校庭や教室、全校集会、ラジオ体操、国語の時間、眼保健操）を提示した。私は写真の説明は行わず、児童の疑問を解くだけにした。児童の文書テキストを分析してみると、児童が自分にとって身近な話題（小学校生活）の中の「異質性」に対して興味を示したことが分かった。時間割や給食より、ラジオ体操に注目する児童が多かった理由について、次のように考察した。中国のラジオ体操は児童が認識していたラジオ体操と大きく違った。つまり、児童はラジオ体操の違いに注目したのではなく、自分の認知の中の「違い」の幅の大きさに目を向けていた。

児童の文書テキストから「面白かった」「びっくりした」「おどろいた」「楽しかった」などの記述はたくさん見られた。「異質性」に当たって、児童は、自分が思っていた違いとは、異なる違いによって、「異質性」について再認識することができた。図 3 の H 児は日本と中国は同じようにアジア圏内の国であるため、ラジオ体操は似ているはずだと考えていた。しかし、思ったことと違って、両国のラジオ体操はかなり違いがあった。H 児は日本と中国の違いに驚いたのではなく、自分の「違いの構造」の変容に気付いて驚いた。

日本とは違うラジオ体操が、同じアジアけん内なのにかなり違うところがおどろいた。

## 図 3. H 児の文書テキスト

また、「違い」の幅の大きさにより、児童が目の前の具体物からそれを載せている文化について目を向けることが可能だと考える。A 児も M 児も中国のラジオ体操と日本のラジオ体操の違いに止まらず、「ラジオ体操」から「毎日これを行っている中国の子どもたち」「日本人があまりしない動きをしている中国人」に興味・関心をもち、その文化について認識したり理解したりしようとするきっかけになると考える。

中国のラジオ体操は、日本とちがって難しい動きでした。1つ1つの動きが複雑でこれを覚えるのはとても大変だと思います。だから中国の子どもたちはすごいなあと思いました。給食がなくて一回家に帰るのは日本では考えられないことなのでとてもおどろきました。

#### 図 4. A 児のテキスト文書

日本のラジオ体操は、すごくゆっくりでみじかいけど、中国のラジオ体操はとてもリズムが速くて、種類が多くてすごいなあと思いました。私は中国のラジオ体操であまり日本人はしない動きがたくさんはあって国がちがうとたくさんのがちがうなと気づきました。中国語タイム、とても楽しかったです。ありがとうございました。

#### 図 5. M 児のテキスト文書

##### ・日本で使う文字

「日本で使う文字」という小単元を扱うことで、日本語の文字、漢字と仮名に目を向け、それぞれの由来や特徴を深く理解することをねらいとした。

まず、平仮名だけの文と漢字だけの文を提示することで、日本語を書き表すために漢字と仮名が必要であることに注目させた。その後、万葉仮名を提示して音に注目させ、仮名は漢字の音を借りて作られたことを理解できるようにした。万葉仮名から仮名に変わる過程を実際に児童に体験させ、漢字と仮名のつながりを一層印象に残すことができた。

L 児(図 6)と S 児(図 7)は漢字を仮名に変える活動の中で、一部の仮名は万葉仮名(漢字)の音をとって作られたことに気付いた。しかし、この規則は「『川』→『つ』」に適応できず、L 児は「一画の仮名はどのようにして作られていったのかが難しそうなので気になりました。」、S 児は「『川』から『つ』が作られたとは知らなかった」と記述した。自ら規則を見つけ、またその規則は全てに適応できないことに気付き、自分の認識と異なる「違いの構造」の変容が起こった。

漢字を仮名に変える時に、その漢字の読み方が仮名になっていることが多いと感じました。漢字はその物のみためからきているものもあるのは知っていたけれど、確かにそれでできた文字は一つでも意味があると思いました。一画の仮名はどのようにして作られていったのかが難しそうなので気になりました。

#### 図 6. L 児の文書テキスト

初めは、ひらがなは、その漢字の読みに入っている音を使ってつくれると思っていたけど、「川」から「つ」がつけられてたとは知らなかった。漢字についてあまりくわしく考えたことはなかったからためになった。

#### 図 7. S 児の文書テキスト

また、児童が漢字と仮名を比較することで、二つの文字の本質的な違いに気付く、日本語としての特徴を理解することができた。H 児は漢字と仮名は本質的に違い、「異質」であることに気付き、さらに日本語としての合理性を再認識した。M 児は「なんで日本には三つも文字があるのか」と疑問を抱いたが、今回の

学習を通して、文字の違いに気付き、それぞれ日本語として成り立つ意味があることが理解できた。

普段、何気なく使っている漢字や片仮名・平仮名にもそれぞれ様々なメリット・デメリット、本質に違いがあることがよく分かった。また表意文字だけや表音文字だけだとわかりづらいため、両方を使ってこれで日本語の会話が成り立っていることをとても驚いた。

図 8. H 児の文書テキスト

仮名は音を表す表音文字、漢字は意味を表す表意文字の2つの言葉は聞いたことがなかったため、今日知れてとても勉強になりました。日本は、漢字、ひらがな、カタカナの三つの言葉があって、その3つを使い分けたり、漢字をおぼえたりと、大変で、「なんで三つもあるんだろう」と思っていたけど、ちゃんと意味があったので今日「がんばっておぼえよう」と思いました。

図 9. M 児の文書テキスト

最後に、日本で使うもう一つの文字、ローマ字の必要性と特徴に焦点を当てて児童に考えさせた。寿司と花火の日本語と英語、中国語、二つの言葉の三つの言語での表現の比較を通して、日本で生まれたものの表記は世界中で同じであることに気付くことができるようにした。さらに、世界中で使われている日本語をまず個人で三つ考え、その後、班で共有する活動を行わせた。

日本で作られたものを世界に広げるために、日本語の発音でローマ字を作った規則は全てに適用できないことに気付いた児童がいた。H 児はこの規則に沿って考えたら、花火は中国で作られたが、日本は中国語の「煙火」を使わず「花火」を使うことに対して疑問を抱いていた。H 児の気付きは文化の「非交換性」に繋がる考えである。「なぜ」とさらに追究していくことで、中国の「煙火」と日本の「花火」のそれぞれの文化における意味を明らかにし、「異質性」から文化の「非交換性」に気付くことが可能になると考える。

中国で作られた煙火は、なんでほんでは煙火ではなく花火なのかきになった。

図 10. H 児のテキスト文書

#### 4 成果と課題

本実践研究では、文化の「非交換性」を用いて、「異質性」を扱う教育のプロセスの構築を試みた。成果として挙げられることは以下のような二つあると考える。

- (1) 「同質性」を前提とする「異質性」を提示することは一番児童の興味・



関心に繋がる

今回の実践研究において「異質性」に繋がる対象を二つの方向から選択した。中国の南北の春夏秋冬は「異質性」を前提とする「異質性」である。中国に行ったことがない児童は、中国の四季に対して曖昧なイメージをもちながら何となく自分がいるところと違うと考えることが多かった。一方、中国の小学校と日本の小学校を比べる場合には、「同質性」を前提とする「異質性」である。「同質性」を前提として考えると、「異質性」であることに気付いた際に自分の中の「違いの構造」の変容が起き、「異質性」への興味・関心から「異質性」が載せている文化に目を向け、さらに追求していくことができる。また、それをきっかけとして自分の文化を深く考えることに繋がる。

(2) 文化の「非交換性」に繋がるため、比較する対象に属する文化の他の要素に気付くことは有効である。

国語科の授業において平仮名と漢字の比較や中国語タイムにおけるラジオ体操の比較は、文字に属する言語である日本語と中国語の比較と、ラジオ体操に属する中国人と日本人を関連させる思考まで到達すると、文化の「非交換性」により近づくことができる。つまり、一つの比較する対象からさらに発展していき、二つの比較する対象をもつことは文化の「非交換性」に気付くことは大事である。

児童が「異質性」に対して改めて認識する場面や、自他を尊重することに繋がる言動も見られたが、実践に当たってまだ不十分だと考え、以下の二点から課題を述べていきたい。

(1) 「異質性」として提示した対象について

「異質性」を意図的に選択することで、児童が「違いの構造」の変容に気付くことに繋げることができる。今回の実践において提示したすべての「異質性」の対象は児童の「違いの構造」の変容を起こせるものもあれば、そうでないものもあった。児童とよりコミュニケーションを取り、児童理解をした上で選別する必要があると考えられた。

(2) 文化の「非交換性」に気付く手立て

文化の「非交換性」に気付かせるため、児童が「違いの構造」の変容に気付いた上で、それに繋げていく発問が必要だと感じられた。今回の実践において比較対象の「違い」に気付かせる発問は工夫していたが、児童自身から

なぜ「違いの構造」の変容が起きたかとその背景を考えることに繋がる発問はしていなかった。「違いの構造」の変容に気付いた児童に対して、授業だけにとどまらず普段の関わりの中でさらに考えさせる場面を見つけ、文化の「非交換性」に気付くことができるようにしたい。

## 参考文献

1. OECD 教育研究革新センター（2013）『学習の本質』明石書店
2. 佐藤郁哉（2008）『実践 質的データ分析入門』株式会社 新曜社
3. 高松美紀（2018）「世界俳句の検討による伝統的な言語文化の相対化 — 国際バカロレア TOK の視点を取り入れて—」全国大学国語教育学会『国語科教育』83 巻、pp. 42-50
4. 松下佳代（2011）「＜新しい能力＞による教育の変容—DeSeCo キー・コンピテンシーと PISA リテラシーの検討」『日本労働研究雑誌』No614. September. pp39-49
5. Getting Smart in partnership with edu Innovation *Quick Start Guide To Implementing Place-Based Education*  
(<http://www.gettingsmart.com/wp-content/uploads/2017/02/Quick-Start-Guide-to-Implementing-Place-Based-Education.pdf>) (2019 年 1 月 3 日閲覧)